

笑泉幸

土佐清水市立清水小学校
校長室便り 令和2年6月25日

5分後に意外な結末とは！？

「校長先生、これ読んでみてください。子どもが面白いと推薦してくれた本です。短編小説だからすぐに読めますよ。」
と図書先生から本が届きました。
昔から読書は得意な方ではなかったのですが、おすすめて言うことでページを開いてみることにしました。
『学校嫌い』という題名です。なんだか意味深な題名です。

ある日のこと、早朝の白い光が射しこむ室内に、母親が足を踏み入れた。
部屋の中には大きなベッドが置かれており、その上にはまるでさなぎのように、布団を頭からすっぽりかぶった息子が寝ている。いいかげん、ご飯を食べて着替えないと間に合わない時間なのに、まったく起きる気配がない。
母親は、「しょうがないわね」と口の中でつぶやくと、息子に声をかけた。
「起きなさい。小学校へ行く時間よ！」
「……いやだ、行きたくない」
布団の中から、くぐもった声が聞こえてきた。
〈……中略……〉
「母さんに話してごらんなさい。何でも聞いてあげるから」
母親がベッドの端に腰かける。息子は逃げられないと悟ったか、ためらいがちにぼそぼそと答えた。
「この間、話したとおりさ。友だちはたくさんできたんだよ。みんな僕のことを好きだといってくれて、休み時間には一緒に遊んでくれた。なのに、僕だけ…ができなかったせいで、仲間はずれにされたんだ」
息子の声はだんだんと小さくなって、ほとんど聞こえないほどになった。
「聞こえないわ。一体何ができなかったというの？」
「……逆上がり」
〈……中略……〉

このあとは給食での出来事、忘れ物のことなどでみんなにいろいろ言われてしまいます。
ガタガタとふるえだす息子の肩を、優しく布団ごしにたたきながら、はげまします。そんな母に息子は、「かんたんに言わないでよ！母さんに何が分かるんだよ！本当にこわいんだから！」とうたえます。それでも学校に行くように言う母に「僕がこわい思いや、いやな思いをしてまで学校に行かなければならない理由を教えてください」と今にも泣き出しそうな声で息子が叫びます。
それまでは優しくあった母親が、布団に手をかけ、思いっきりひっぱがしながら、母親は断固たる口調で、きっぱりと告げました。
「理由は簡単よ。まず、あなたは52歳のいい年をした大人だから。それに何より、あなたは校長

先生だからよ！」
引きはがされた布団のなかから現れたのは、髪も薄くなり、見るからに中年ぶとりをした息子がべそをかいている姿だった。〈おしまい〉
と言うお話でした。

さて、なぜこの本を紹介してくれたのでしょうか？子どもからの推薦だけが理由ではないはずですが…

毎日いろいろなことに追われて、自分自身を見失い、疲弊している姿を哀れに思ったのでしょうか。



いえいえ本当は、「もっと頑張ってください。あなたならできるかも……」と頼りない校長にエールを送ってくれたのかも知れません。

人からの言葉に込められたいろいろな思いが頭の中を駆け巡りますが、根が単純なのか多くのことをポジティブに考えてしまいます。

校長になって6年経ちます。幸いなことに、職員心配(?)をよそに私は、本の中に出てくる校長先生のように学校に行きたくないと思っことはありません。

毎朝、必ずあいさつしてくれる子ども達(少しずつ増えています)、「せーのー！おはようございます。」と声を掛け合い、ハモったようにあいさつしてくれる子ども達もいます。

検温は家庭か、学級で測るようにはしていますが、家から毎日測ってくる児童の中には、必ず校長室の窓越しに、「30度〇分です。」「3、〇、〇」とあいさつ代わりに声をかけていく児童もいます。

本当に毎日が幸せなことで、朝が待ち遠しくて仕方ないといった感じがします。

確か前任の校長先生も清水小学校のことが大好きで、朝早くから夜遅くまで学校にいたのではないのでしょうか。(現在は、畑仕事にいそしんでいるみたいですが…校長先生にとっては、子どもたちも植物も『育てる』とか『一緒に育つ』という感じが好きだったのかも知れません。)

さて心配事としては、学校再開後に決めた児童の名前を早く覚えると言うことが、まだ達成できていないことです。そのことを思うと焦る毎日です。年には勝てないのか……？

いやいや布団を引っぱがしたお母さんなら、今の私に「あなたならできる。」と声をかけて、応援してくれるはずですよ。

今回この本を紹介してくれたことで、職員室の先生達と話題にしながら楽しむことができました。その本全てを読んだわけではないので、たくさん短編小説の中からなぜ子どもがその物語を選んだのかは聞いていませんが、その子どもはもしかしたら、主人公の校長先生と私を重ね合わせたのかも知れません。ぜひ、理由を聞いてみたいですね。

それにしても、物語の思いもよらなかった結末に一同が驚きましたが、同時に笑いもおき、ゆったりとした時間が流れたように思います。

このお話を読んでこの校長先生に伝えたいことは、「清水小学校はとても良い学校で、子どもたちも素敵ですよ。まだ52歳と言うことなので、私がこの学校から異動になるとき、ぜひ来て下さい。きっと毎日布団から、早く出たくなると思いますよ。」と言うことです。